

# 昭和

18

大佛次郎

山本周五郎

松本清張

司馬遼太郎

# 文学全集

# 昭和文学全集



18

---

大佛次郎

---

山本周五郎

---

松本清張

---

司馬遼太郎

---

---

---

# 昭和文学全集

第18巻

昭和六十二年十一月一日 初版第一刷発行

著者—上林暁、和田芳恵、野口富士男、川崎長太郎

八木義徳、木山捷平、檀一雄、外村繁

発行者—相賀徹夫

発行所—小学館

一〇一—〇一—東京都千代田区一ツ橋二丁目二番一号

振替 東京八二〇〇番

電話 編集・〇三—一三〇—五二二六

業務・〇三—一三〇—五三三三

販売・〇三—一三〇—五七三九

印刷—大日本印刷株式会社

製本—大日本印刷株式会社

若林製本工場

用紙—三菱製紙株式会社

著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568014-8

©IKUO TOKUHIRO SHIZUKO WADA

FUJIO NOGUCHI CHIYOKO KAWASAKI YOSHINORI YAGI

MISAO KIYAMA YOSOKO DAN AKIRA TONOMURA 1988

\*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。\*本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社まで許諾を求めてください。

目次

大佛次郎

5

7

帰郷

150

地霊

山本周五郎

201

203

青へか物語

小説 日本婦道記

312

松の花

320

梅咲きぬ

326

箭竹

334

斧堀

342

忍緒

348

春三たび

357

不断草

365

藪の蔭

374

糸車

383

尾花川

389

桃の井戸

397

おもかげ

406

墨丸

416

二十三年

424

菅笠

434

風鈴

443

小指

452

よじょう

松本清張 469

471 北の詩人

610 西郷札

631 或る「小倉日記」伝

648 啾々吟

664 菊枕ぬい女略歴

674 火の記憶

683 湖畔の人

693 断碑

712 父系の指

730 石の骨

司馬遼太郎 745

747 殉死

814 ひとびとの足音

1009 作家アルバム

解説

1017 大佛次郎……尾崎秀樹

1024 山本周五郎……木村久邇典

1031 松本清張……三好行雄

1038 司馬遼太郎……山崎正和

年譜

1045 大佛次郎……福島行一

1050 山本周五郎……木村久選典

1055 松本清張……編集部

1061 司馬遼太郎……大河内昭爾

1068 底本について

1069 用字用語について



大佛次郎







## 帰郷

### 孔雀

「どうです？」

と、画家は連れを振り返り見た。

「よい景色のところでしょう。」

一時間ばかり前に、強いスコールが過ぎて行った後で、くすんだ赤瓦あかがわに白壁の多いマラッカの町は、繁る熱帯の樹々とともに、洗い出されたように目に鮮やかな色彩を一面に燃え立たせていた。雨雲の一部が裂けて、凄まじいばかりの日光が降りそそいでいる。町を縁取っている海は、まだ黒雲の下にあって、泥絵具で描いたように光のない灰色をしているが、これもやがて暗れて来るので、見ている間に、青みをさして変化して来る。その青色が、まだ極めて沈鬱ちんうつな調子のもので、遠

景に長く突き出している椰子やしの林ばかりの黒い岬とともに、光の氾濫はんらんした町を一層絢爛じゆんらんとしたものに見せているのだった。刻々と、その光は動いて、海の上にはみ出して行こうとする。

「丁度いい時、来たんですなあ。」

と、画家は向きを変えて、ゆるい坂道を前面に在る昔の石のカトリック寺院が廢墟はいじよとなつて、四方の壁だけ大きく立っているのを見上げながら歩き出した。

丘の斜面の芝原で柄の長い鎌をふるって草を刈っていたマレー人が、二人を見て高野左衛子さゑこの日本の着物の姿に驚いたように手をやすめて突っ立って見ていた。日本人が出会って見ても、この南方では、はっとして眺めるほど、純粹の日本の夏姿であった。いや、昔の東京の町なかでもホテルのロビーにいる時

か、歌舞伎かぶきの廊下でも歩く時でない、これまで、大胆に人目を惹く身なりを、しかもきりっとした感じに着こなす女は見られない。

高野左衛子は、内地の生活では洋装一点張りだったのが、シンガポールへ来るようにきまると、普通ならば和服に慣れた者も洋装に変えるところを、逆に、日本の夏の着物や帯を揃そろえて持って来た。落着いた好みに、どの令夫人かと町で人を驚かすかと思うと、思いついて派手な白縮緬ちぢみの染浴衣あぶらひで、平気で自宅で客の前に出ていた。

「驚いていますよ。」

「え？」

「いや、あのマレー人の先生が、あなたを見て吃驚びっくりしているというんですよ。」

過去にただの磨き方でない時期があったと知れる。白い顔の皮膚がしつとりと輝くようなのが、笑つて、

「お化けだと思つてしょうか。」

「いや、きれいなものは、風俗の違う国へ行つても、きれいに見えることは、間違いない。」

「小野崎さんは、お口がお上手ですから。」

「いや、そうじゃない。」

ブンガ・チナの大きな木が一面に大輪の白い花を付け、雨後のせいで強く匂っているの

を見上げていた。

その花の匂いだけでなく、どの木も草も匂っている。土も匂っている。寺の廢墟の内部に入ると、屋根はなく筒抜けの青天井で、四方の壁の隙間にも、小さい木が枝を伸ばして髯を生やしたように繁っていた。毀れた窓からは青い海が覗いている。

「あら、空っぽ？」

「ポルトガル人が建てたのが、和蘭陀人が攻めて来た時、毀してしまっただけですね、古いものなんです。千六百何年っていうから、ぎつと三世紀昔のものだ。」

何もない内陣の石の床に、羅典文を彫刻した平たい大きな墓石が寝かせてあるのが、織田信長の時代に日本に切支丹の布教に来たフランシスコ・ザビエルの遺骸が、この下に一時埋まっていた位置を記念する。その他にも幾つかの同じ形の墓標が、船の画や、紋章らしいものや文字に彫刻して残っているが、昔あった位置もわからなくなっているらしく、壁に立てかけて並べてある。頭蓋骨に、骨を二本組み合せて、墓には不似合いに感じられる絵もあった。

しかし、これは左衛子には、あまり興味のないことらしく、あたりを見廻していた。外陣の床も草で一面である。小鳥が外の木の繁みに隠れて啼いているだけだ。

「これだけです。」

「でも、いいところね。」

「いつか来た時は、朝だったせいか、蝙蝠が幾つも飛んでいましたっけ。」

歴史という考えが、画家の頭に泛んだ。

「最初に、ここに土人の王朝があって、そこへポルトガル人が攻め込んで来て城を作ったのを、和蘭陀人が来て占領し、その後で英国が手を入れたんですね。それから今度は、日本人が来て……この後は、また、どこの国が来るんでしょうかね。黒子のように小さい土地だけだ。」

「外の景色がいいわ。小野崎さん、どこか写生をなさるの。」

「あなたに待つて頂くのは、お気の毒ですけれど。」

「いいんです。あたし、アブドラに運転させて、町の方を見て、いい時分にお迎えにまいりますわ。」

「それア有難いんですが、買物をなさるにしても、もう町には何も残っていないでしょうよ。」

「女だけで危険なことは御座いますまいね。」

「いいえ、もう静かな、人気のいい町ですから。僕なんか、のんきに、ひとりどこへでも入って行きますよ。やはり歴史のある古い町ですから、シンガポール辺りの、人間ばか

りうようよしていて人気の悪い新開地と違わし、とにかく小さいんです。自動車でしたら、往来にいる誰れかを探そうとなきつたら、二十分も走らせたら必ず、どこかで見つかるでしょう。そんなに狭い……」

運転手は、芝刈りのマレー人のところへ行って、ふたりとも悠長に芝に腰をおろして話し込んでいた。

「ドラ！」

と、名前のアブドラをちぢめて澄んだ声で左衛子が呼ぶと、小腰をかがめて敏捷に、自動車のところに戻って来た。やがて自動車はエナメル塗りの背を光らせながら、ゆるやかに坂を降りて行き、青い樹立の陰に姿を隠した。

「買出しだな。」

画家は、こう思うのだ。高野左衛子はそういう女なのである。椰子の林が、黒い火花を連発したような形で海を縁取っているデュフイ好みのマラッカの明るい風景や、三世紀も昔に日本にも来た耶穌の坊さまの墓などには興味はない。もっと、彼女は、現世的な本能を働かして動いている。

どういう由縁があって、左衛子が海軍の特別の庇護を受け、三十そこそこの若さでシンガポールに来て、高級な料亭を開いているの

かは画家もまだ知らずにいるが、静かで貴族的な容貌に、目立って現実的な欲望が組み合わさっていると知っても、別に驚かないのだった。

画家は、拳闘家のような大きな肩をして見かけは堂々としているが、もう五十に手がとどいていて、髪など白い方が多く、青年ばかりの従軍作家の中では変り者扱いにされていたが、その代り、安っぽく驚いたり腹を立てたりするような性質はなくなっている。

ほんとうをいえば、この小野崎公平は、自分を画家だとは思っていない。若い時代に画家として勢い込んで仏蘭西に勉強に行ったのだが、パリに着いて美術館を廻っている間に、最初の一箇月で画を描くのの断念してしまったという男であった。もともと画家としては頭の冴えた方の男だったし、古今の大画家の作品の前に立って、自分の才能の限度が見えてしまつて、勉強しても無駄だと思ひ込んだのである。それから、段々と身を持ち崩して、ぼん引同様の留学生相手のガイドから寄席の楽屋番までして、日本に帰つても画を出さずに、美術批評をしたり、画商の真似をしたり、新劇の舞台裏で働いていた。そこへこの戦争で、内地には食えないと見ると、急に画家に戻つて運動して軍属となつて従軍した。パリでやっていたように、もぐり

の生活法であつた。お座りのスケッチで、画に素人の軍人をだますのは易しかった。ところが、他にすることが何もなかったという事情もあるが、南方に在る間に、ほんとうに自分で画を描きたくなつてゐるのを知つて、自分が先ず驚いたものだった。熱情が復活して来たのは、幸福であつた。

命令次第で危険な前線近くまで出ることもあるのに、暢気だが、どこかに死の影を予覚して、生きている間に何かしたいと思うようになったのかも知れぬ。

このマラッカの町は以前に訪ねた時から気に入つてゐた。色が複雑だし、静かな環境で、それも、過ぎた歴史の影が、土にも木にも滲み込んでゐるような気配が、文学書なども読むのが好きだった彼に、暫くでも戦争を忘れさせてくれるのだった。

画家が丘の樹立の間を歩き廻つて、漸く場所を決めて絵具箱をひらいた時分に、高野左衛子は町に在る印度人の貴金属商の店を見つけてアブドラに自動車を停めさせた。表通りだが狭く汚ない町で、その店だつて小さくて、唯一の硝子棚の中には耳飾りの類を貧しく陳列してあるだけで、はだかの土間には、印度人が噛んで吐き出す檳榔の実の唾が、血のように散らばつていて、足を入れるのが気

味が悪かつた。

麻の服を着て、鬚のたくましい印度人が、椅子から立ち上つて、左衛子を迎えた。

「ダイヤモンド、ない？」

自由なマレー語であつた。

印度人は、ターバンにつつんだ頭を、横に振つた。

「御座いませぬ。」

左衛子は、独得の鉛色の顔に白眼が際立っている相手の笑い方に、隠れているものを読み取つてゐた。

「心配ないのよ。藏つてあるんでしよう。」

「ルビーだけ。」

「じゃア、お見せなさい。」

真昼の外の光が強烈だから、店の中は薄暗いが、自動車を走らせて風を受けて来た者には蒸し暑かつた。左衛子は、日本の扇を帯から抜き取りながら、往来の方を見た。日本人は絶対に通らなかつた。マレー女が華僑の男が歩いて過ぎるだけで、筋向うの店は空家のように埃によごれて戸が閉つてゐるのは、何の店か、もう売るだけの商品を失くしたものに違ひなかつた。その屋根の上に、同じ塔を二つ並べた教会らしい建物が伸び上つてゐた。暗緑色に塗つて、青い立木とともに、乾いて悴しい風景である。左衛子は知らないが、ザビエルを記念した寺院であつた。ルビ

一を数種類見て、黙って、その一つを言値で買い、軍票で支払いながら、

「ダイヤ、あるんでしょ。」

ルビーは、そう追及する前提として買取ったものであった。果して印度人の態度は変化して来ていた。

「ダイヤモンドは、日本軍が命令で買って行ったから、なくなりました。」

「でも、一つや二つは、残っているでしょう。シンガポールでも華僑の店に行けば、ちゃんと奥から出して来て見せてくれるのよ。」

「あっても高いです。」

「お見せ。」

たくましく傲慢に見えた鬚面は、遂に、讓歩の色を見せた。三カラットばかりの大ききのダイヤモンドは、左衛子の華奢な指に捕えられて、皮膚にプリズムの光を散らした。

「もっと大きいのが欲しいわね。」

乞食が左衛子を見つけて、店頭に立った。これ以上は瘠せられないというくらいに肋骨がむき出して、足の脛など、杖のように細い印度人であった。それと見ると運転手のアブドラが口ぎたなく叱りつけてから、かねて主人に云いつけられているとおり、自分が小銭を出して、追い払うのだった。

確かにマラッカは小ぢんまりした町であっ

た。さかり場の広い通りは、五分も自動車で走ると、カンポン（郊外）の風景となって、人家がとぎれ椰子の林や畑が現れて来る。床の高いマレー人の住家が見つかったら、忽ち町は終るのだ。

「チャイナ・タウン。」

と、左衛子は、運転手のアブドラに云いつけた。富も物資も南方では英国人が立ち去った後は華僑が一手に収めているからだ。

人家の間を流れるマラッカ川は、掘割のように水が濁っていて動かない。華僑の町は、その橋を渡ってから、海岸に沿って長く続いている。それも商店街となっているのは、橋の附近だけで、その奥は、シンガポールあたりの富裕な人たちの、隠宅や、大住宅が軒を並べていて、白昼も門の扉を固く閉ざして人通りも稀な閑静な屋敷町が続くのである。建て方は、どれも同じ様子で、瓦屋根に反りを打たせ、壁が白い表構えに、板の厚い塗戸を左右から閉ざした門の真上には、漆塗りの大きな文字の額を掲げて、

天官賜福  
五福臨門

といった風の文字を彫って朱や碧を塗った聯を掛けてある。客が外に立って案内を乞わない限り門をあけないので、内部に住む人の声も往來に漏れず、この炎熱の白昼に、この

町の生活はまるで密封されたようにひっそりとしているのだ。左衛子のような外来者から見れば、空家ばかりの街を見るような具合で、ただ自動車を一直線に走らせるだけのことである。

印度人の店で、左衛子が買入れたダイヤモンドは三顆であった。まだ他にも同じような店がありそうに思っ窓から探しているのだが、城のような家ばかりが隙間もなく並んでいる閑静な町の外観は、失望に値した。マラッカは金持ちが隠居する町だと聞いたので、宝石商は多いものと期待して来たのだった。

「帰りましょう。」

左衛子は、丘の上で画を描いている画家のことを思い出した。

自動車を返して、さっきの橋の附近まで来ると、前方の通路の中央に自動車が停っているのが見えた。自動車は殆ど全部徴発して、軍の日本側の主な機関が使用していたことで、左衛子は近寄りながら、その車の乗手に注意した。高級車のキャディラックの新式のものだった。

これがバンクしていたので、タイヤを取換えるので、人は降りて道端の樹の陰に立っていた。防暑服の若い海軍士官に、ヘルメット帽をかぶった背広の中年の紳士である。先方からもこちらの自動車を注意して見まもって

待っていた。

「あ！」

と、左衛子は急に、

「ドラ、停めて。」

急停車した勢いに舞い立った埃を、ヘルメット帽に手を掛け顔をそむけて避けた平服の紳士は、セレーター根拠地の参謀の牛木大佐で、左衛子がこれまで客として観察して来た限りでは、先任参謀の威厳を保とうとしているのか無愛想で、うちとけにくい人柄であった。

「パンクで御座いますか。」

大佐は、例の、木の実を嵌めたように固い、きびしい目附で見まもっていたが、

「君は、また、ここに何をしに来たのだ？」

質問の意地悪さを感じながら、

「マラッカを見ていなかったものですから、報道班の画家の方に、案内して頂きましたの。」

「見物？」

「ええ、まあ。」

にこりとして、大佐の連れの副官の若い中尉の、これは帝大出で、心安くしている方にも会釈を送った。

「見物の時期でもなからうが、連れはあるんだね。」

「ええ、お仕事をしていらっしゃるんです。」

大佐は相変らず棒のように突っ立っていたが、

「それで、今日中に、昭南に帰るつもりか。」

「ええ、店が御座いますから。でも、お車は大丈夫なんですか。御用をお急ぎのようでしたら、手前どもの差上げでも……」

「いや、それまでのことはない。しかし、単車で夜道になると、途中が危険だから、帰りは急ぐか、どこかで私たちを待って一緒に行くといい。昼間はよいが、夜はジョホール川の辺が近頃、物騒のような情報が入っている。」

「何か出るのでしょうか。」

無邪氣らしい驚き方を顔に見せて、左衛子は成功した。

「それア……」

と、大佐は、初めて笑って見せて、

「ゲリラも出るが、あの辺は虎の出る名所だ。」

「可怖く御座いせんわ。虎でしたら、皆さんのを拜見して慣れておりますもの。先任参謀は御承知ございますまいけれど、この今西中尉も虎の方では、なかなか有名で御座います。」

若い中尉は、顔を赤くして、

「おい、マダム。」

牛木大佐も笑って見せたが、何となく別の思念にとらわれているような他所所しい笑

顔であった。

「危険を、その調子で甘く見るからいかんだ。やはり我々について一緒に帰った方がいい。単車は危険だ。それからだな。ついでのこと、君、これから我々の行くところへ一緒に行って、ある人に、君の純日本風の姿を見せてやってくれぬか。」

「どちらへか？」

「固く断わって置くが。」

結論を下す例の軍人の流儀であった。

「今日のことは堅く秘密にしておいて貰わぬと、いかぬ。牛木の私用だが、どこへ行って、どんな人間に会ったか、ということをや、女将の胸にだけ、おさめて置いて貰うのだ。」

## 無名氏

平服でいるせい、か、話していると、牛木大佐も日頃とは違って、うちとけた調子を見せた。多勢の部下の前にいる時とは気分が違うのであろう。

「その画描きさんは、どこで待っているんだね。ほっとくのも、悪からうが、ぎっと一時間は待って貰うことになる。」

「平気な方なんです。スケッチを始めると一

日中でも、ひとりでいる人ですから、あたし行って断わってまいってもいいのですが。」

「いや、後で副官をやる。場所さえ判っておれば……日本人は、算えるほどしかない町だろうから。」

大佐は、ヘルメット帽の底が影を置いている顔で沈黙した。いつまでも平然として無表情でいられる黙り込み方であった。

「どちらへ、おいでになるので御座います。」大佐は、木の突のような形の目で見返してから、まったく別の返事をした。

「和服の女なんて、この十年は見たことない男だろうね。だが、用談があるので、その間は、君にも遠慮して貰う。」

「やはり、海軍の方……？」

「いや、そうではない。」

また、きびしい感じの、話の継穂のない返事であった。タイヤの修理は終っていた。各自の車に戻ると、大佐の自動車を先に、左衛子がたった今通って来た道を走り始めていた。暑い風が窓から入って来た。

ヘエレン・ストリートと、金属板に英文で町名が標示してあったが、白壁に密封されて、門並に固く塗戸を閉ざしたあの華僑の住宅街である。目的の家が近いことは大佐の車が際立って速度を落して徐行し始めたので

知れた。左衛子が見ていると、案内役の副官が、窓から首を出すようにして、一軒ずつ、門を見ている。そして、自動車は急に停止した。

日ざかりの道路に影を黒く副官が降りた。アブドラが扉をあけて左衛子も降りようとすると、若い中尉は真っ直ぐに歩いて来て、

「暫く……そのまま待っていて下さい。」

大佐も降りないで前の車の座席に白色の背中を見せていた。中尉だけが、二段の石階を昇って行き、片側の壁にあげた小さい耳門の呼鈴を押した様子で、立って待っていた。姿勢はよいのだった。

殆ど人通りはなく、街は岑閑と陽に輝いて静かである。左衛子は、中尉が待つて立っている頭上に、筏がずらの木が繁って紅い花が壁に垂れているのを見た。自転車が遠くから走って来たが、近くなるとこれが日本の陸軍の兵隊で、憲兵の腕章を付けていたが、華僑の家の前に停っている自動車を怪しんだ様子で、徐行しながら覗き込むように見まもって通った。

馬拉ッカの華僑の大住宅は、道路に面して表構えがどれも同じ形式を採っているように、家の内部に入っで見ても、様子がほぼ似たものである。

間口は狭いが建物は細長く、奥行きが深い。ヘエレン・ストリートに門があると、家の裏手は海の潮に直接に触れている。つまり、道路と海との間の短冊のように細長い地所を、どの家も一杯に塞いでいるのである。

門内の狭い庭から、すぐに玄関の客間に入る。石だたみの床に正面の壁に寄せて黒檀の卓を置き椅子を配してある。奥へ入る戸口は、この壁の左右に在って、敷居をまたぐと、同じような形式の部屋で、またその左右の戸口の奥が、これと同じ具合に、更に後方の部屋に続く。正面の壁には文字の対聯を掲げたものもあるが、寺のように仏壇を置いた部屋もあった。

或る部屋の壁には、祖先から代々のこの家の主人だった夫婦の肖像を、額におさめて並べて飾ってある。これは、この家の歴史であった。最も古いものは、まだ写真のない時代なので、彩色した画像で、それも竜の模様を胸につけ孔雀の翹を帽子につけた清朝の風俗の老人に、髪結び方も違い纏足した太太(夫人)が、並んでいる。写真の時代に入ると、服装は南方の気候に順応した簡略のものになっていくが、やがて一、二代で男主人は孫逸仙の写真にあるように詰襟の洋服を着ているようになり、夫人は、マレー風に更紗のサロンを腰に巻き、襦袢のように前で合せる

薄い上衣と変化して来る。そして、次の代に  
来るものは洋服の背広だ。若夫人だけは現代  
に入ってもマレー風か、広東あたりから移入  
される今日流行の支那服だ。故国を離れてこ  
こに根をおろして以来の家の歴史が、重まし  
く客を見おろしているのだ。

更に人は、故国中国産の盆石や、夾竹桃の  
鉢植えのほかに、西洋人の彫刻になる童女や  
馬や犬の大理石像が部屋の裝飾となり、また  
原色版の、狩猟や競馬の図が古風な書の額と  
並んで掲げてあるのを見るだろう。これは、  
オクスフォードやケンブリッジに留学した若  
い主人が、飾りのついた置時計などと一緒に  
英国の土産に持って帰ったもので、これもこ  
の家の歴史の新しい頁なのだ。

若い主人は、流暢に、倫敦仕込みの本格的  
英語を話す。

こうして縦に並んだ居間の奥が、中庭のよ  
うに屋根を抜いて、土間に石の井戸や、かま  
どのある厨房で、そこから階段が二階にある  
家族達の居間や寝室に昇っている。大きな木  
があって、片側から出た屋根の庇とともに、  
日陰を作っていて、並んだ水甕の水に涼しい  
影を投じている。

下男が取次いで来た牛木大佐の名刺をこの  
家の若主人が受取ったのは、二階から階段を  
降りる途中であった。

若主人は、小肥りの臙に鼠色の背広を上手  
に着こなして、頭もきれいに撫でつけて、髪  
を光らしていた。

「日本人？」

と、強く問い返してから、無言で厨房の土  
間を奥に入って行った。

内庭を向うから囲むようにして母屋とは別  
の一棟がある。昔マラッカの海が現代ほど遠  
浅にならず、貿易がさかんだった時代には、  
ジャンクをすぐ岸まで寄せて荷揚げをしたの  
で倉庫に用いられた建物だが、貿易の繁栄を  
シンガポール港に奪われて、マラッカの華僑  
の家が静かな隠居所や住宅に変化して以来、  
用のない部屋となつて一部の屋根は破れたま  
までいる。

若主人の葉氏は、その戸口から入ると、

「シイサン（先生）」

と、呼んだ。

どこも空室で、硝子窓越しに海が見えてい  
るのが、一番奥の部屋から人の声が答えた。  
葉氏が、その部屋の戸口に立つと、ヴェラ  
ンダのような海に向っている縁から、藤椅子  
を軋ませて、身を起した人物がある。

「お客さんですよ。日本の海軍の士官。」

葉氏の言葉は英語だった。手にしていた名  
刺を見たが、中国人でいて、葉氏は漢字を僅

かしか知らないもので、特に日本人の名刺はよ  
く読み下せないのである。

無言のまま、その人は立ち上つて来た。裾  
の長い、薄青い支那服を着た体格は、南方に  
いる中国人には珍らしく肥っていて、顔も色  
白で、頬の肉附よく、柔和な福相であった。

名刺を受取って読むと、急に顔に血の色が  
さした。若く見えるが、五十前後の年齢らし  
いが、皮膚が子供のよう美しく染まった。  
「心配しないでよい。」

と、これも流暢な英語で云つて、

「これは私の古い友人なんだから。多分、こ  
の間やつた手紙を見て、訪問して来てくれた  
んだろう。ひとりですか。」

私は知らない。と葉氏はまだ不安らしい面  
持で答えた。

「連れがあるかしら？ 私は、このカードの  
男にだけ会いたいのだが……葉さん、そう話  
してくれませんか。他の人間がいたら外に待  
たせて置いて……構わないから、この男だ  
け、この部屋に案内して来て下さい。」

「イエス、オーライト。」

若主人の葉氏が出て行くと、男は、名刺を  
見なおした。柔和な顔に普通でなく烈しく動  
いたものがあつた。その興奮を抑えると、窓  
に近寄つて日が一面にあたっている沖を見ま  
もつた。



海は、この建物の土台となつてゐる石段の真下に来てゐるのだが、潮が退いて、近くには泥の洲が醜く現れてゐた。厨房の内庭に生えている巨樹は、この家の屋根を越えて、太い枝を伸ばして、熱帯樹らしい大きな形の葉の繁りに、この窓に邪魔な目隠しを附けてゐる。陽はさしてゐながら暗緑色に見える海の沖は、木の葉の間に挟まつてゐるのだ。涼しい代りに薄暗いこの部屋には、中国風の簡単な寝台に、大きなトランクが一個、他に数冊の洋書があるだけであつた。

牛木大佐の足音が、厨房の庭を横切つて接近して来た。

屋内に入つて来て、板敷の床に歩調の正しかつた靴音は、部屋の入口で停止した。

ヴェランダに立つて海を眺めていた人は振り返つた。牛木大佐が、例の強い調子で見まもつてゐるのと丁度目が合つた。

「守屋。」

と、大佐は、押し出すようにして、

「生きておつたか。貴様。」

無言のまま笑つて、これも強い目で見返してゐたが、

「貴様、か？」

と、妙に孤独な感じで、その人は呟いた。

「久振りで、俺をそう呼ぶ奴に出会つたもの

だ。何年目か知らん。しかし、俺の名を忘れて来てくれたものらしいな。」

「手紙を見て魂消た。それも、横文字で名が書いてあるのでは、ぴつたりせぬ。キョウゴ・モリヤとは、誰れかと思つた。」

「何より元氣なので結構だ。しかし、……貴様、もう大佐だど！」

「そんなものらしい。」

と、牛木大佐は笑つた。

「だが、貴様、どうしてこんなところにおる？」

「国籍もどこに在るか覚束ない人間が、どこにいようが不思議はない筈だが、しかし、実は流石の俺も驚いたのだ。スマートラのサバンから船でシンガポールへ入つたらこの戦争じやないか。俺の船はプリンス・オブ・ウェールズが出勤して行くのと、港の入口ですれ違つたが、まだ戦争とは知らなかつた。上陸して、否も応もなく、そのままシンガポールに足留めだ。日本の爆撃機が頭の上の空を飛びおつた。海軍機だなどと思ひ、実に何とも云いようのない心持がした。」

「そうだ。守屋。」

と、大佐は、深く頷いて、

「貴様が、それに乘つてゐなかつたとはいへぬ。」

「そんなことは考えなかつた。それよりも、

自分の命のことだつた。俺がここで帝国海軍の爆撃で死ぬかも知れぬということだつた。

運命の奴が、皮肉な、しめくりを附けようとしてゐる、としか考えられなかつた。」

「何の為に、シンガポールに來たのだ。」

「歐羅巴へ帰る汽船をつかまえる為だつた。実に、それどころか！」

と、童顔に苦笑が泛んだ。

「それから、陸上部隊のシンガポールの攻撃だ。死ぬまで日本人に会つても知らぬ顔をしていようと決心してゐた俺の前に、兵隊が出て来た。職業軍人だったら、俺は、そっぽを向いて通る。しかし、無邪氣な、何も知らぬ子供のように若い奴らだつたのは、見ていて変に切なかつた。帰りたくない日本に無理やり帰らされたのと同じことだつた。いや、あるいはそれ以上だつた。」

「日本の兵隊と話したのか？」

「話した。」

と、明瞭に答えてから、

「しかし、守屋恭吾としてではない。ただもう、日本語の喋れるエトランジェとしてだ。

それに、あの連中は欧羅巴のどこかで出遭う日本人とは違つて、意地悪く人のことを詮索しようとしな。時には、ひどく心を動かされたことがあつた。つくづくと悪い戦争を始めたなあ、そう思わないか、貴様。」